

藤子不二雄『わが分裂の花咲ける時』を読む

理学部 4 回生 悠

京都市は百万遍, その一角で毎年秋になると開催されるお祭りがあります。そう, 百万遍知恩寺, 秋の古本まつりです。私は忘れもしない 2020 年の 10 月 30 日, この古本まつりで, とある作品と出会いました。それが藤子不二雄『わが分裂の花咲ける時』です。この日, 大学の食堂で昼食を済ませ, 腹ごなしに知恩寺の境内を歩いていると, ふと“それ”がふと目に止まりました。『COM』1971 年 2 月号です。『COM』は, 1967 年から 1973 年まで, 虫プロ商事から発刊された漫画雑誌であり, 手塚治虫『火の鳥』が連載されていたほか, 藤子不二雄の作品も多数掲載されました。ところで, 藤本先生と我孫子先生は当時まだコンビ解散前なので, 「藤子不二雄」の名義となっています。とはいえ, 既に藤本先生と我孫子先生の作風ははっきりとわかれており, 『わが分裂の花咲ける時』は我孫子先生の作となっています。

藤本先生に関しては, 2009 年以降刊行された『藤子・F・不二雄大全集』により, 全ての作品を容易に読むことができるようになりました。しかし, 我孫子先生に関しては, 漫画雑誌に掲載された後, 一度も単行本に収録されなかった, もしくは単行本に収録されても, 単行本自体が絶版となり, 現在では入手のむづかしい作品が多く存在します。『わが分裂の花咲ける時』もそのひとつです。目の留まった古本屋のスペースに置かれていた『COM』は, その 1971 年 2 月号ただひとつでした。果たして, その号に『わが分裂の花咲ける時』が掲載されていることが知れたとき, 私はほとんど奇跡のように思いました。こうして, 私は 1000 円でそれを自身のものとしたのです。ちなみに, 当時の価格は, 定価で 200 円です。

『わが分裂の花咲ける時』のあらすじについて, Wikipedia 記事『わが分裂の花咲ける時』には次のように記載されています (2022 年 11 月 15 日現在)。

浪人生の喜一は受験のプレッシャーから現実逃避を繰り返し、やがてパラノイアになる。その妄想の中では祭りが行われていた。現実とのせめぎあいの中で妄想はその強度を増し、重度の分裂病（統合失調症）に達した喜一。祭りはいつまでも終わらない……

これが, 文字で表現しうる最も適切な, もしくは文字の限界ともいえる説明でしょう。

この短篇で一貫してモチーフとして描かれているのは, 「花火」と「祭り」です。主人公が布団の中に「花火」の姿を認めることから物語は始まります。予備校への道すがら, 道の真ん中に, 巨大なサザエの貝殻が浮かんでいるを見つける主人公。この場面は, 同じく我孫子先生の作品『マグリットの石』を彷彿とさせます。貝殻の穴に向かって主人公は吸い込まれてゆき, この辺りから妄想と現実の境界がぼやけていきます。母体帰帰を連想させる貝殻の中では, 「花火」が咲いているのです。

予備校の授業中も, 主人公の頭の中では「花火」の姿がちらつき, それは「祭り」の情景へと繋がります。人々は揃って踊りに興じ, ややあって, 「祭り」が終わろうとすると, 主人公は叫びます。

「ああ! 祭りよ終わるな!!」

現実の世界に引き戻されても, 既に主人公の視界に, 現実生きる人々の姿はありません。これ以降, 作中に登場する主人公以外の人々は, すべてのっぺらぼうとして描かれるか, もしくは後ろ向きで表情は見えません。

この表現は強烈で、私は恐怖さえ覚えました。ついさっきまで妄想の中で踊りに興じていた人々もいなくなり、そこには主人公ひとりが残ります。そこには喧騒どころか、音のひとつもありません。

そして、「花火」によって、再び「祭り」がもどってきます。気が付くと、「祭り」が行われている境内に主人公は立っていました。最終コマでは、ひときわ大きな花火が頭上で破裂し、物語は幕を閉じます。最後に、花火が花開く「ドーン」という音は、我孫子先生の代表作『笑ウせえるすまん』の喪黒福造が、人々を破滅へと導く音でもあります。

この短篇のタイトル『わが分裂の花咲ける時』が、「(花火が)咲ける」と「(精神が)裂ける」を掛けているのは明らかで、花火が咲ける瞬間は、すなわち主人公の精神が裂ける瞬間でもあります。そうして、現実と妄想の世界を行き来していると、ついにあるとき、主人公の顔は「ガシャ」と音を立てて、割れたお皿のように分裂してしまいます。まさに、「わが分裂の花咲ける(裂ける)時」です。

「花火」と対応するものとして、「祭り」の描写も途中から入り込んできます。「祭り」は、どこか昏く、それでいて浮ついた気分を誘います。『わが分裂の花咲ける時』は全編を通して、そうした浮ついた感覚が表現されており、読んでみると身体が地面を離れて宙に浮かんでいるような、奇妙な感覚に陥ります。

「花火」をひとつの引き金として、妄想の世界へと没入してゆく描写は、芥川龍之介の小説『歯車』を思わせます。『歯車』の「僕」の視野には、絶えず回っている歯車の姿があり、しかもその数を次第に増やしてゆくのです。そういえば、「歯車」と「花火」はどことなく似た形をしていますね。円とその中心から放射状に広がる線……。何か、人間を幻想へといざなうものがあるのでしょうか？

この短篇に、話の筋と呼べるようなものはほとんどありません。主人公が妄想の世界に没入し、孤独と狂気に吞まれてゆくさまを、私たち読者はただひたすらに、徹底的に見せつけられるだけなのです。話の筋と呼べるようなものがほとんどない以上、私が感想として書き記せることも、実際のところほとんどありませんでした。奇妙で、幻想的で、蠱惑的で、病的な描写に私たちは吸い寄せられ、その一部となってゆくのです。

それにしても、秋の古本「まつり」で、「祭り」を扱った短篇に出会い、その記事を京都大学11月「祭」で頒布する会誌のために書いていることは、偶然とはいえ、なんだか不思議な気分です。

私がこの作品と出会ったのは、前述の通り、2020年10月30日でした。それからこの記事を書くまでに、実に2年以上の空白を置いてしまったこと……。それは、「現在、正規に読む手段がほとんどないような作品を紹介してよいのか？」という葛藤によるものでした。かつて、『オバケのQ太郎』がそうであったように、『ドラえもん』の一部短篇がそうであったように、『わが分裂の花咲ける時』は気軽に「ぜひ読んでみてください」と紹介できる短篇ではありません。

それでも、今回重い腰を上げてこの記事を書くに至ったのは、今年の春に我孫子先生のご逝去の報に触れたことがきっかけでした。我孫子先生が鬼籍に入られたことは、間違いなく「藤子不二雄」を語るうえでの転換点と言えるでしょう。いつか『わが分裂の花咲ける時』が、『オバケのQ太郎』や『ドラえもん』の一部短篇がそうなったように、広く人々に読まれるようになる日のために、私はこの記事を書くことを決めたのです。

最後に、生涯にわたって数々のすぐれた作品を発表された我孫子先生に、心からの感謝と敬意を。

2022年11月15日 京都市某所にて